

谷口智彦著「上海新風 - 路地裏から見た経済成長」中央公論新社 2006年9月10日刊を読む

上海財経大学

「こっちへ戻って二年ですよ。もうわたしの日本語、どんどんダメになる。あんなに勉強したのに」

「そんなことないじゃないですか。お上手ですよ」

「いえ、自分がいちばんよくわかっているんです。だってあなたね、授業だってみんな英語なんですよ。」

なぜだか訊いてみて少し驚いた。アメリカに、ポール・クルーグマンという歯に衣着せぬ物言いで日本でも有名な国際経済学の教授がいる。彼が書いた教科書は、全米でよく読まれる国際経済学の定番だ。日本では無論、とっくに翻訳が出ている。ところが上海財経大学で彼が受け持つ学部の講義では、この本を原書のまま読んでいるということだった。

「だからね、講義で使う言語も自然英語だけになってしまっ」

この大学はいい大学だけれども、超一流というわけではない。それでも分厚い英語の教科書をナマのまま読んでいると聞いて、内心、こりゃ日本はかなわないかもと思った。

[コメント]

World Economic Forum(世界経済会議)の East Asia Economic Forum(東アジア経済会議)で、日本の国益(National Interest)を思い何回も何回も発言なさっていた谷口氏の著書。上海財経大学の教授と会ったときの思い出を記したものだが、日本人に最も必要な英語力の問題を鋭く突いている。

- 2009年2月23日林明夫記 -